

自らを見つめ直し、伝えたいことを明確にして表現しようとする子の育成  
— 6年「今のわたしを伝えます 6梅文集の作成」を通して—

岡崎市立根石小学校 緒方 涼子

## 1. 主題設定の理由

普段の日常生活の中に、「書くこと」は溢れている。レポート、手紙、記録文や、ちょっとした連絡・伝言など。老若男女限らず、いつでも誰でも「書くこと」が必要とされる場面が多くある。そんな時に一番重要なことは、伝えたいと思うことが読み手にきちんと伝わる文章が書けることだ。また、それを手助けしてくれる誰かが、いつでも自分のそばにいるとは限らない。伝えたいと思うことを、自分の力で正確に言葉にできるようにならなければならない。

卒業を控えた6年梅組の児童に、「書くこと」を通して自分を見つめ直す機会を与えられたらと考えた。小学校生活6年間での自己の成長を確かに感じながら、その証を自らの力でしっかりと綴ってほしいと願った。小学校卒業という節目に、感じ、思ったことは、二度と体感できない。これから先の人生にはない貴重な財産となる。それを書き残すことで、自分のさらなる成長につなげたり、励みになったりするといふ。

しかし、「書くこと」は容易なことではない。根気はあるし、「書く意欲がない」、「書く内容が浮かばない」、「書く方法が分からない」など、児童の「書くこと」への悩みはさまざま。本学級の児童も、出来事を順序よく書くことはできるが、それに対する自分の思いや考えを書くことは苦手である。そこで本実践を通して、自分が一番伝えたいことは何なのかということ意識させながら、自力で文章が書ける子を育てたいと考えた。以上のことから主題を設定し、実践を試みた。

## 2. めざす子供像

- ・自分の生活を見つめ直し、書くことの意義を実感できる子
- ・伝えたいことが読み手に伝わる文章を、自力で書くことのできる子

## 3. 研究の仮説と手だて

- 仮説Ⅰ： 卒業を意識させる授業展開や、題材を選ぶ段階での指導の工夫によって、書くことへの目的意識を高め、意欲的に書くことができるだろう。**

⇒手だて①：卒業文集への繋がりを意識した「6梅文集」の作成

⇒手だて②：書きたいことを明確にする題材選びの指導

- 仮説Ⅱ： 文章を書く前に構成を練って内容を整理したり、書いた後で十分に推敲したりする機会を与えれば、読み手に伝えたいことが伝わる文章を自力で書けるようになるだろう。**

⇒手だて③：伝えたいことを整理するための作文メモの作成

⇒手だて④：推敲チェックリストと、友達とお互いの作文を推敲し合う場の設定

#### 4. 単元構想（12時間完了）

	時	学 習 課 題	
一 次	1	「書く」と、どんないいことがあるだろう	} ← 手だて②
	2	書くための題材を探そう	
	3・4	伝えたいことを効果的に伝えるための構成を考えよう	← 手だて③
	5・6	一番伝えたいことを意識して下書きしよう	
	7	伝えたいことが読み手にうまく伝わるかを意識して、作文を読み返そう	} ← 手だて④
	8	友だちの作文を推敲して気付いたことを話し合おう	
	9・10	推敲したことを元にして、清書しよう	
	二 次	1 1	「6 梅文集」を読み合おう
1 2		6年間で一番心に残ったことを卒業文集に残そう	

#### 5. 実践と考察

##### ① 抽出児Aについて

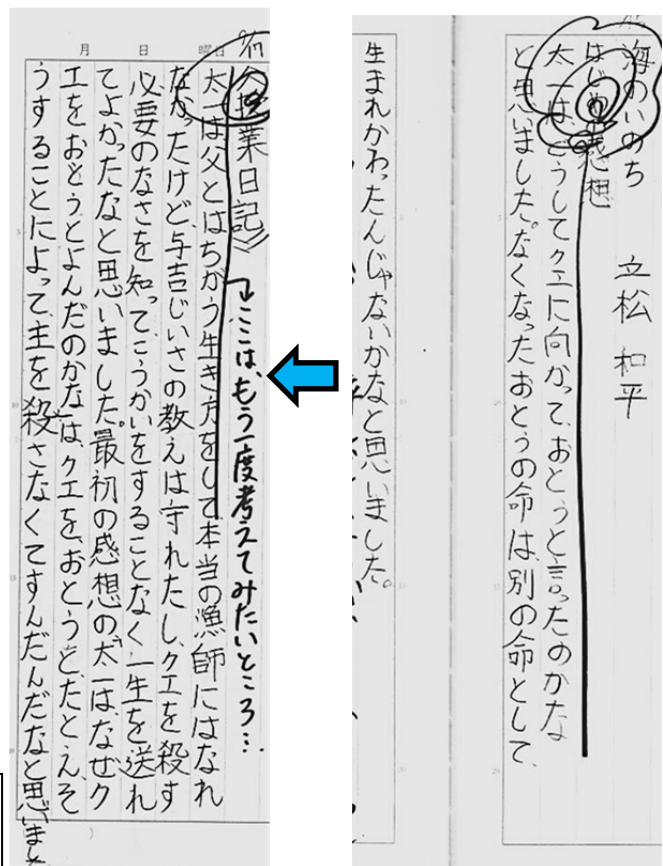
Aはとても消極的な性格で、人前で自分の考えを発表するなどの自己表現が苦手である。交友関係も浅く、1年の前半では表情が暗いことも多かった。

国語授業において、毎時間のノート作りは丁寧に行うが、自分の考えを書く場面では課題に対して深く考えることができず、上滑りな意見しか書いていなかった。

2学期「海のいのち」では、学習を通して叙述にこだわり、自分の読みを構築していこうとしている姿が見えた。(資料①) だが、残念ながら、それをクラスのみんなに自分から伝える機会はなかった。

また日記では、自分の身の回りに起こったことについて、出来事を述べるだけでなく、出来事から考えたことも少しずつ付け加えられるようになってきた。しかし、まだその比重は小さい。今回の実践では、自分が思ったことや考えたことを書くことに重点を置いて、作文の指導をしたい。

資料1 Aの授業ノートより。  
右は「海のいのち」初発の感想、  
左は単元終末の授業日記。



## ② 仮説の検証

### 手だて① 卒業文集への繋がりを意識した「6梅文集」の作成—1

単元を始めるにあたり、一番大切にしたいと思ったことは、「何のために書くか」という目的意識を、児童たちにどうつかませるかであった。それは、そのまま書くことへの意欲づけにも繋がる。「書きたい」という思いをもたせることができれば、それを原動力とすることができる。

そこで考えたのが、「6梅だけの卒業クラス文集を作ろう」ということである。卒業式の時に配られる学校の卒業文集とは別に、クラスで文集を作る。卒業文集と違ってクラス文集に字数制限は無く、基本的には教師の手も加えない。自分たちの力だけで言葉を綴り、文集としてまとめる。そしてそれを、卒業文集作成へと繋げていく。クラス文集で一通り作文を書く流れを経験している児童は、そこで学んだことを基に抵抗感少なく卒業文集の原稿作りに入っていけるだろう。

「卒業文集と同じように、一生残るクラス文集を作ろう」と声をかけ、単元に入った。実際の「6梅文集」と、卒業文集への繋がりについては、「手だて①卒業文集への繋がりを意識した『6梅文集』の作成—2」にて後述する。

### 手だて② 書きたいことを明確にする題材選びの指導

「なぜ書くか」という意識が高まったら、次は「何を書くか」である。題材選びは、作文の良し悪しを決める大変重要な過程であると考えている。まずは児童たちに、「自分が『書きたい』『書き残しておきたい』『読んでもらいたい』と思うことを書こう。」と伝えた。ややもすると、児童たちは「修学旅行の班行動」や「山の学習のキャンプファイヤー」など小学校の一大イベントに流れ、その時の楽しかった思い出をつらつら書く「出来事作文」に終始してしまいがちである。そうならないために、「自分が成長したなあと思うことについて書こう。」「そのことを通して強く心に残った思いや考えを書こう。」と、さらに条件を出した。(資料②)

#### 資料2 題材を決めるときのポイント

以上の題材を決める時のポイントを確認し、全員でこの1年の出来事を簡単に振り返った後で、実際に題材決めに入った。まずは今まで書き溜めてきた自分の日記を見返しながらか、題材のヒントとなるものはないか探すよう声をかけた。

- ①自分が、「書きたい」「書き残しておきたい」「読んでもらいたい」と思うことを書く。
- ②自分の成長を書く。
  - ・考え方が変わった事
  - ・できるようになったこと
  - ・新しく始めたこと
  - ・がんばってきたこと
  - ・印象に残っている経験
- ③それを通して強く心に残った思いや考えを書く。

また、大体の題材が決まったら、書くことの中心がぼやけてしまわないように、「～(出来事)～を通して～(このように)～なった・思った・考えた。」という短文で表すようにした。これにより、題材にしようとしている出来事は決まっていますが、そ

これから何を考え、どう自分の成長に繋がったかということ意識できていない子も、必然的にその時の自分を振り返ることになるだろうと考えた。

題材の候補をいくつか挙げた子には、「自分が卒業の節目に書き残しておきたいと思うことはどれか。」と問いかけた。また自分の成長に気づいていない子には、こちらから題材を提示することもあった。「怪我をして陸上の大会に出られなかったことで、それまでの自分の浮かれていた気持ちに気付いた。」「運動会の7段ピラミッドの練習で言った先生の言葉を聞いて、『成功させたい』という思いが高まり、みんなの気持ちの一つになった気がした。」など、対話を重ねるうちに、選んだ題材の出来事も自分の成長も、児童の思いの中でより具体的になっていった。

Aは、迷うことなく「海のいのち」を通して自分が考えたことを文章にしたいと言ってきた。ノートには、「『海のいのち』を通して、自分は人と意見がちがうこともあったので、自分の思ったことを、自信を持って意見にしようと思った。」とあった。「海のいのち」の授業を通して、人とは違う自分だけの意見をもつことの尊さにAは気づ

《Aの授業日記より》

1年でたくさんの思い出があったけど、一番今の私に合う題材は、「海のいのち」しかないと思いました。題材はすぐに決まりました。変わったこともあるし、思ったこと、考えたことがたくさんあるからです。

いたのだ。その日の授業日記（資料③）にも、「『海のいのち』しかない」と、力強く書かれていた。自らの成長を考えたとき一番に浮かんだものだったのだろう。

### 手だて③ 伝えたいことを整理するための作文メモの作成

題材が決まったら、作文メモを使って作文の構成を練りやすくなるようにした。（別紙①参照）メモは上段と下段に分かれていて、まずは上段の一番書きたいこと・伝えたい思い（題材）、心に残った言葉・具体的なエピソードから書き始めた。題材は作文の骨子となる部分である。行き詰ってしまったときは、いつでも題材に立ち返るよう伝えた。下段は、書き出しの1文と始め・中・終わりの内容が書けるようになっている。「書き出しが決まらない」というのは、児童の多くがもつ悩みの一つである。作文メモの段階で枠を一つ設けて考えることで、実際に原稿用紙に書く際には迷いなく勢いに乗って書き始められるといいと考えた。始め・中・終わりの枠には、それぞれ「印象に残っている出来事について」、「出来事の詳しい内容」、「今の自分のその出来事に対する考えや思い・出来事を見つめる自分」を例として、書く内容を簡単に箇条書きした。上段に書いた心に残った言葉・具体的なエピソードをもとに、どの事柄を使って書くか決めながら、作文の大筋の流れを作った。

Aの作文メモを見ると、上段では思ったことをとにかく書き出そうとしていることが分かる。（資料4）そして左側のメモの欄には、「ノートにあった先生の『いいね』+ほかの人の意見→考えてみようと思った。」とあり、書き出したものの中から特に自分が言いたいことを、記号を上手く使って簡潔にまとめようとしている。

下段では、「始め」で「海のいのち」に対する始めの印象、「中」で実際の授業での様子、「終わり」で学習を振り返って自分が考えたことという、Aが考えた文章構成が見て取れる。(資料5) また、上段で細かく書き出したことを簡単な箇条書きにして、書く順序を決めていっている。メモの上段から下段にかけて、雑多にあって独立していたそれぞれの事柄が、徐々に整理され

**心に残った言葉・具体的エピソード**

- ・最初は長い文章だな、どうせ私にとってはあ、さり終わるんだなと思った。
- ・一度読んだをけでは何も分からなかった。
- ・考えてもよく分からなくても、何もやっていた。
- ・自分の人の意見か、私の意見を出す、手助けになった。
- ・授業日誌で自分か思ったことを、まずすぐに意見にしてみた。
- ・ノートには先生の「いのちの文字」があった。そこから強いこまねるようにも、と考えてみたいと思えた。
- ・思ったことを意見として出すには時間がかかた。それでも思っただけのことではなく、発言の時に、自分とはちがう意見が出て、まじが、たとして、も自分の意見はし、かり持とうと思った。
- ・ノートにあった先生の「いのち」
- ・ほかの人の意見
- ・自分の意見は、持て、作る、持て、考えた、みようと思った。

**始め**

- ・物語文「海のいのち」を見て思ったこと
- ・最初の物語文に対する気持ち
- ・思ったことを意見にする
- ・なんとなく考える
- ・深く考えようようにこれって思った
- ・毎回考えるし思いうし意見にするが楽しんでいた。このことに自分でもこの物語を分かるうとして、自分がいた。
- ・言葉にこだわらなかつた。
- ・毎白い答えは出なかつた。
- ・人の意見

**中**

- ・自分の自分のどの出展事に対する考えや、出展事を見つめる自分
- ・今まででさとうにしてきてしまった。
- ・海のいのちに出会ってよかったです。
- ・自分の意見の大切さ、も、と考えるたいとも思った。

**終わり**

- ・自分の自分のどの出展事に対する考えや、出展事を見つめる自分

資料4 Aの作文メモ上段より

資料5 Aの作文メモ下段より

資料6 Aの授業日記より

「Aの授業日記より」  
 今まで本格的に書いたことはなかったけど、今回は作文のもととなるよう、段落のことを考えて書きました。題名と始めの文は時間がかかったけど、私が納得する作文になるよう、自分が強く思ったことをできるだけメモに書きました。

関係付けられていったのが分かる。

その日の授業日記(資料6)には、「私が

納得する作文になるよう」と、作文への意欲の高さとこだわりが感じられる。また、「自分が強く思ったことをできるだけメモに書きました。」とあり、作文メモが書く材料を集めるための十分な手助けとなったことが分かった。

#### 手だて④ 推敲チェックリストと、友達とお互いの作文を推敲し合う場の設定

「自力で書ける」ようになるには、自力で自分の文を直せるようになるのではないかと考えた。普段書いた文章を読み返すということがあまりない児童たちに、以下のように段階を経た実践を試みた。

##### (ア) モデル文から推敲のポイントを学ぶ

まず、自作のモデル文(資料7)を使い、「この文章を読んで直した方がいいと思うところはどこか」と問いかけた。児童たちは「書きたいこと」に注意しながら、気になったことを発表した。「『車内には～思った。』の文章が長くてくどい。区切りがあるといい。」「『声をかけてみました。』じゃなくて、かけてみた。」にする。」「『ありがとうね。』と言われた時の私の気持ちが知りたい。」「『名古屋に着いたら～靴を見に行

【自作のモデル文】  
 ・書きたいこと：電車で座席をゆずって、いい気持ちになれたこと。  
 先週の日曜日、私は電車で名古屋へ出かけた。車内には、たくさん荷物を持ったおばあさんがいて、空いている座席を探していたが空いていなかった。そのまま立っていた。私は席をゆずってあげようかなと思った。声をかけようかどうかととても迷った。すごく緊張したけれど、がんばって声をかけてみました。  
 するとおばあさんは、「ありがとうね。」と笑顔で言ってくれた。座席に座った。  
 名古屋に着いたら、ずっと欲しいと思っていた服を買って、うれしかった。かわいいものがたくさんあって、どれにしようか迷った。服を買ったら、次は靴を見に行った。  
 勇気を出しておばあさんに声をかけてみてよかった。次に同じことがあっても、また声をかけたい。

資料7 自作のモデル文

った。』はいらぬい。「最後の段落は、座席をゆずったときのいい気持ちの内容を書くといい。」などの意見が出た。Aは、全体的に「思ったことや考えが少ない。」「名古屋に着いたら～靴を見に行った。」について、「書きたいことは電車で席をゆずったことだから、もう少しその時の気持ちを書いて、着いた後のことはなしでいいと思う。」などと

書き込んでいた。モデル文が出来事の羅列になっていて、肝心の書き手の思いが十分に書かれていないことに気付いているようである。

この学習を通して、児童たちは書きたいことの中心に注目して文章を直すことを学んだ。書きたいことを伝えるためには、何が足りなくて、何が余分なのかということを考えながら文章を読み返すといいということ伝え、推敲のポイントをまとめた。

（イ）推敲チェックリストを使って、自分が書いた文を推敲する

児童たちが発表したことをもとに、推敲チェックリストを作成した。（資料8）このリストを意識して、自分で書いた文章を推敲することにした。リストは、①、②、③が文章の内容面に注目したもの、④、⑤、⑥、⑦が文章の形式に関わるものというように、①から⑦に下りていくに従って、推敲から校正の過程へと移っていくようにした。

**● これであなたも推敲マスター！！ ●**

☆意識して文章を読み返せたら、チェックしよう。

- ① 自分の思いや考えをはっきり書けているか。
- ② 表現の仕方にこだわっているか。
- ③ けずったほうがいいところ・付け加えた方がいいところはないか。
- ④ 出来事を順序よく書けているか。
- ⑤ 一文が重複していたり、長すぎたりするものはないか。
- ⑥ 誤字・脱字はないか。
- ⑦ 原稿用紙の使い方は正しいか。
- 仕上げ 書いた文章を音読してみよう。
  - ・読みやすい文章のリズムや流れになっているかな？
  - ・意味が伝わりにくいところはないかな？

資料8 推敲チェックリスト

Aは、何度も自分の文章を丁寧に読み返し、特に表現の仕方にこだわって推敲した。Aの下書きを見ると、朱で書き加えたものをさらに消して直しているところもある。資料9は、「海のいのち」の授業が進むにつれて、自分の考えを意見にすることに楽しさを感じるようになり、物語を進んで理解しようとしていることへの驚きが書かれた部分である。下書きの「正直、こんなこと考えることなど予想もしていなかったの、自分でもおどろいている。」という部分は、まるまる1文に斜線が引かれている。そして欄外に、「自分 私が 真剣にやりたいと思っている自分に 思うなど 少しおどろ

いた。」と、推敲の跡が残っていた。どちらも、内容面では大差ない。しかし、推敲文は下書きの「こんなこと考えるなど」の部分が「真剣にやりたいと思っている」と書き換えられており、実際にどんなことを考えていたのかが明確になっている。また、下書き文の「おどろいている。」の部分も、推敲文では「おどろいた。」となっており、文法的なねじれも整えられている。何度も自分の文章を読み返し、どんな表現をすれば自分の言いたいことが伝わるか、どうすれば文章の流れがよくなるか、必死に考え、より良いものを目指そうとしているAの信念が見えた。Aの推敲チェックリストには、①、②、③、⑤、「仕上げ」にチェックが入っていた。⑥、⑦の校正段階まではどうやら十分に意識できなかったようだが、与えられた時間のなかでAが作文と真正面から向き合い、真摯に取り組んでいた結果だと理解したい。

この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の
この物語を理解しようとしている自分の	のに気付いた。	なと予想もしていな	この物語を理解しようとしている自分の

資料9 下書きと、欄外の推敲の跡

### (ウ) 友達とお互いの作文を推敲し合う

個人での推敲の後、3、4人のグループで友達の作文を読み合う場を設定した。Aのグループでは、Aの作文を読んだ友達が感嘆の声を上げていた。一緒に学んだ「海のいのち」で、Aがここまで深く物語について考えていたことに気付いたからである。「A、いつもあんまり発言しないから、こんなにちゃんと考えていたなんて分からなかった。でもすごい。」と、同じグループの子から声をかけられ、Aの顔が誇らしげにほほえんでいた。他にも、表現のこだわりにも論点が向けられ、特に最後の一文「私の国語に対する曇っていた感情が、海に映る青空のように晴れた。」については、「海のいのち」も意識されたとても素敵な表現だと盛り上がっていた。

友達からは、Aの作文は「私が」や「私にとって」という言葉、「正直」、「思ったままを」、「真っ直ぐ」という言葉が使われる頻度が多いと指摘を受けた。Aは友達にもらった意見をもとに、清書に取りかかった。自らの推敲と、友達による推敲を参考にしながら、再度慎重に言葉を選びながら作文を仕上げている。

### 手だて① 卒業文集への繋がりを意識した「6梅文集」の作成—2

以上の過程を経て「6梅文集」は完成した。全員の作文を印刷し、表紙・裏表紙をつけてまとめた。その他、文集委員を募ってお楽しみページを作成したり、1年の写真をちりばめたりして、自分たちの力で思い出の詰まったオリジナルの文集が出来た。

それを元に、卒業文集の原稿の作成に取りかかった。「6梅文集」で書いたものを参考に原稿を書いてもいいし、新たに題材を探して書いてもいいということにした。児童たちは決められた分量であることや、読み手がクラス文集とは違うということ意識して、新たな緊張感をもって取り組んでいた。卒業文集では「6梅文集」の時と違

って、自分で推敲した文章に教師が最後の手直しを加えた。不明瞭な部分や文章が整いきれていない部分、もっと膨らませたい部分などを指摘して、一人一人と対話した。

Aは、「6梅文集」と同じく「海のいのち」について卒業文集を書くことに決めた。一度自分の中で完成させたものにもう一度向き合い、よりよい形で卒業文集に残したいというAの意気込みが感じられた。教師との対話では、終末部分にこれからの自分の思いを書いてはどうかとAに助言した。作文を書くことで再認識した自分の大きな成長を、今後の自分に反映して行ってほしいという思いがあった。Aは、「これからは、自分の考えを自由に書ける。もう、ためらわずに書ける。」と、力強い言葉でまとめた。頼もしいAの姿に、これからのAがどう成長していくか大変楽しみになった。

卒業文集を書き終えた後、Aは授業日記に「この文集は自分の集大成だと思います。」と結んだ（資料10）。題材選びから推敲、清書まで、自分の文章にこだわり続けた唯一無二の卒業文集に仕上がった。

卒業文集を書き終えて  
5年間が学んだことはたくさんあって、中でも授業  
の中で自分が大きく変わったのが海のいのちだったの  
文集は自分の終たいせいたと思  
きたけ

## 6. 成果と課題

### 【仮説Ⅰについて】

資料10 Aの授業日記《卒業文集を書き終えて》より。

- ・卒業文集を見据えた「6梅文集」を作ることで、児童たちの取り組みの姿勢は真剣そのものだった。一生残るものだという意識が、中途半端なものでは満足できないという気持ちを引き出していた。
  - ・自分の成長にこだわって題材を決めたため、各々が自分をじっくり見つめ返して書くことができた。
- △・「6梅文集」と卒業文集とであまり変わり映えのしない作文を書く子がいた。「6梅文集」で書いたものに満足してしまい、教師との対話で内容を深めきることができなかった。今後はもっと有効な個別指導のあり方を考えてみたい。

### 【仮説Ⅱについて】

- ・作文メモを使うことで、まずは思いついたことを書き連ねるところから始めることができた。メモの段階で、題材から外れた内容を指摘することができた。
  - ・推敲チェックシートの利用により、どんなことに気を付けて推敲したらいいかがはっきりした。それによって、自分の文章へのこだわりが生まれた。友達に作文を読んでもらうことで、自分の文章が第三者にどう伝わるかを知ることができた。
- △・作文メモの下段でどんな順序で書くかということにもっとこだわられるように、付箋を利用して事柄を自由に移動できるようにするなどの工夫ができたならよかった。
  - ・友達の記事を推敲し合う場面での手だてが弱かった。特に話し合いの進め方やグループ編成の在り方をもう少し考えてみたい。